

麦積山の両小龕モチーフと法華三昧観法

東北大学大学院博士課程 付 恩浩

中国西北地域の入口に位置する甘肅省天水市麦積山石窟は地元の人に塞上江南とも呼ばれ、北朝彫刻の宝庫として親しまれている。

石窟の正壁で左右対称に二つの小龕を開き、それぞれに交脚菩薩像と半跏思惟菩薩像を入れる構成、いわゆる両小龕モチーフは、麦積山早期石窟群を造営する工房に受容され、麦積山の特徴の一つとなった。このモチーフは、早期窟が果たす宗教機能を考える上に重要である。

年代が下がるに連れて、交脚菩薩と半跏思惟菩薩像の像容は変わり、石窟内での配置にも変化が生じる。最古例と見られる七四、七八両窟を造営する工房は、すでに両小龕モチーフを石窟造営に用いた。やや時代が下ってから造営された石窟群の残存造像は、両尊の宗教意味を考える上でさらに重要な証拠を与えてくれる。中でもとりわけ重要な一四八窟は、正壁交脚菩薩像、半跏思惟菩薩像の下にそれぞれ二つ、計四つの小龕を開く。また一部は現存しないが、左壁、右壁の上端にそれぞれ四つ、下の小龕内にも左右対称に四つの小龕を並べて開く。それら小龕の中にはいずれも釈迦多宝の二仏並坐が配置される。一四八窟は七四、七八窟より小さく作られ、また、正壁光背上部左端に僧形禪定像の壁画が描かれる。このように禅窟としての機能が備わる一方で、法華思想も伺える。

両小龕様式の源流はガンダーラにあって、中国内では麦積山以外の事例として北魏下花園石窟(河北省)、北周延安出土郭乱造像碑(陝西省)が知られる。現存するものが少ない中、これらは、宗教的意味だけでなく様式系譜を考える上にも見過ごせない事例となっている。

この両小龕の尊格を巡る論争は今日に至っても続き、定説のない状態である。本発表では、二尊それぞれの尊格と組み合わせられることによって表出される宗教的意味を他の事例と比較検討し、麦積山によく見られる両小龕に限らず、交脚菩薩像と半跏思惟菩薩像が組み合わせられる多くの場合は、僧侶の禅修のために『思惟略要法』の「法華三昧観法」に基づいて造営されたものであり、釈迦太子から弥勒菩薩へという、一種の「釈迦授記弥勒」を表現していることを論じたい。